

エクストリームシリーズ2013 第2戦 奥多摩大会

奥多摩大会優勝チームコメント

チーム・コナ・ウィン 鈴木 幹久 さん

那珂川大会から、早1ヶ月。今年2戦目の奥多摩大会がやってきた。この日は、他のレースと重なっていて、鈴木さんは事前に出場できないことがわかっており、代わりに近藤みどさんが出場する事になっていた。みどさんは、ハセツネで上位入賞する実力を持つ強者で、私も気を引き締めて臨まなくてはいけなかったが、奥多摩は過去にもよく練習して土地勘もあるし、何とかなるだろうと考えていた。

ところが、一週間前となり、キャプテン道向から、突然不幸のメールが届いた。「みどさんが都合により出場できなくなりました。代わりに東村さんが出場する事になりました。」と。東村さんといえば、誰もが知る強者で、フルマラソンなどサブスリーは当たり前。私より5歳も年上ながら、いつもガンガン走っているパワフルおじさんだ。東村さんが助っ人で出場することは同時に、私がキャプテン道向に引きづられ、苦しいレースをしなければならぬことを意味していた。それからの日々、不安を抱え、前日もよく眠れないままレース当日を迎えた。

シリーズ戦の中で最多チームが参加する奥多摩大会は、今年も40チーム以上が参加。開会式のチーム紹介でもアドレース初参加の人が多数いてこの大会の人気ぶりは健在だ。この日の天候は、午後から雨の予報で、私の気持ちと同じように、雲が広がりどんよりしていた。

ブリーフィングを終え、10:00レーススタート。まずは、順不同で4つのCPをランで回るといふもの。我々はまず、奥多摩駅近くの河原にあるCP2をとり、その後、大回りをしてロスしながらも、神社の階段上にあるポイントを取得。続いて、あえて「むかし道」をいかず、オンロードから回って、CP3を、最後にCP4をとるルートで、スタート地点に戻ってきた。若干のロスが響いたのか、この時点でトップと10分差がついていた。スタート地点からCP6へ向かうバイク上りの急坂は、いつもながらハードだ。早々にキャプテン道向に牽引されながら登っていく。CP6、CP7は順調にとって、CP8のカヤックへ。

奥多摩のカヤックにも苦い経験がある、あれは3年前だっただろうか。スタートして約5メートル、気合がからまわりしていきなり"沈"。その後慎重に進むも、釣り人に「こっちにくるなー!」と言われるも方向が定まらず、何故か釣り人の方へ近づいていってしまい、しまいには石を投げられる始末。そんな苦い経験から、どうしてもこのカヤックだけは慎重にならざるを得ない。クイズを確認して帰路は順調に進むも、周りから見るとピクピク乗っていることが一目瞭然だったらしい。カヤッククイズは、生き字引き東村さんの好判断で"正解"。カヤックを終え、写真に写っている3箇所のポイントを地図上に記載するというチームチャレンジへ。ここは細かい道が入り組んでいて、ややロスするも何とか切り抜けた。しかしトップのとれいるざんまいとは15分の差が開いてしまった。レース後半は、明らかにパワーコースということがわかり、15分の差を縮めるべく気合が入る。白丸から青梅街道を経て鳩ノ巣から続く九十九折の長い坂道をバイクで登る。途中からキャプテン道向に牽引され、ヒーヒー言いながら必死でペダルを回した。CP12に到着すると、さらに長い山が続く。このバイクで、トップとは4分縮めるが、私の身体はすでに悲鳴を上げている。申し訳ないと思いつつも、5歳年上の東村さんにザックを持ってもらい、キャプテン道向に引っ張られ、長い長い坂道を登っていく。「もう限界だー!」と何度も脚が止まるが、牽引ロープは、グイグイお腹を引っ張って休む暇を与えてくれない。そういえば、我部さんから送られてきた、大会要綱で、今回の奥多摩の総距離が25km~35kmと、いつもより少ないと思ってちょっと安心していたが、そこは我部さん、距離が短い分、こんなハードなコース設定にしたのか。薄れていく記憶の中で、そんなことを考えながら登っていくと、やっと山頂へ着いた。ザックを持っていたいたため、途中水の補給ができなかったが、用意していたコーラを一気に飲み干し、やっと我々返ることができた。

CP13をとり、ここからは下り基調とばかり、気合を入れるも、すでに脚は限界にきており、内転筋がピクピクいい始めている。来た道とは違う長い下りルートを辿っていくと、CP15に戻ってきた。と、先頭を走っていたとれいるざんまいのたけぶーが、出血して国士館救急隊に治療してもらっているではないか。どうやらCPに着く手前で、手のひらをザックリやってしまったらしい。

たけぶーの心配をしながらも、後続の接近を意識し、ゴールまでのバイクを走らせる。しかし、ついに左脚内転筋に限界が訪れ、「つたー!」と悲鳴をあげる。キャプテン道向が準備しておいたクランクトップを舌の裏に噴射してもらうも、しばらくはペダルを回すことが辛い。青梅街道に出てもちょっとした上りで力が入らず、するずる後退してしまう。最後のCP19をとって、あとはゴールというところでやっと気持ちが楽になった。最後の激坂を登り、念願のゴール。5時間をちょっときるタイムでのゴールだった。

宮古島トライアスロン、オブシディアンとハードなレース直後で、急なオファーだったにもかかわらず、快く引き受けていただいた東村さんには、本当に感謝の気持ちで一杯だ。一昨年の桜枝岐以来2年ぶりだというADも、ぐいぐい先頭に行く持前の体力と、素早く正確な地図読みを発揮し、本当に頼りになった。

表彰式でもコメントがあったが、キャプテン道向は、昨年の桜枝岐から連続4レース総合優勝となった。エクストリームシリーズでは、奥多摩のみ総合優勝がなかっただけに、どうしても優勝したい強い想いがあったという。振り返ると、今回の長い山登り

では、出走をいやがる馬のように、疲れ果て腰が引けた私に対し、無言ながら絶妙なタイミングで、牽引ロープを引っ張り続けていた。そこには体力以上に、勝ちたいという強い気持ちが込められていたように感じる。かつては、多少ロスしても体力任せでカバーしていたレース展開から、極力ロスを減らすキャプテン道向の冷静な地図読みへの転換が、好成績に繋がっているのだろう。

なにはともあれ、無事レースが終わったことにホッとした。奥多摩では初めて行った「もえぎの湯」も空いていて、最高に気持ちよかった。表彰式までは、野球場裏の東屋で、帰ってくるチームを労いながら、ゆったりした時間を過ごすことができた。

天候が悪い中、最後まで頑張ったチームの皆さん、お疲れ様でした。そして何より、コース設定から、寒い中最後までご尽力いただいた運営スタッフの皆様、本当にありがとうございました。

奥多摩大会 参加チームコメント

スパモニ探検隊別働隊 鈴木 篤 さん & 祥 くん

今回のレースも楽しかった。とりわけアドベンチャーレース初体験の12歳長男と美人女子大生と一緒に走り、2つの関門をそれぞれ数分前に通過する劇的な展開で完走を果たして共に喜びあえたことは嬉しかった。

1995年に間寛平さんとレイド・ゴロワーズを日本人初完走して以降、EAST WINDを立ち上げ、多くのレースを走ってきた。その中で、いつも2つの課題にぶつかっていた。一つは、人間としての関係性を重んじるチーム制である以上、自分が強くなっても結局が一番下の選手のペースがチームのペースとなるため、究極的にはまるで選民思想かのような「同類を集める」ことに重きが置かれること。二つは、競技に先鋭的になればなるほど、仲間との会話や共感、自然や地域制とそこにある時間を楽しむ余裕から乖離していくこと。同じ思考の者を集め、競技性に特化して戦う。これを別の言葉で言うと「スポーツ」だろう。では、アドベンチャーレースはスポーツだろうか。「より高く、より困難へ」掲げたアルピニズムも同様の問題にぶつかり、思想の分化と行為の極端化を迎えた。だが、登山という行為そのものが失われていないことは、根本的かつ共通項なるものが別にあることを示している。

答えをより歴史と思想のあるものに求めれば宗教が最適に思える。鍛えた者にしか理解できないとする密教も深遠さが魅力的だが、広い間口で仏心に触れることを一義とした大乘も必要なものだった。そして、そのいずれもが、つまり数千年の叡智の結晶であるものが、変わらずその最終目的を衆生救済に置いていることからしても答えはある。「知る者は伝える義務がある」のだ。自分と闘いたければ、一人でとことんやればよい。私にとってはソロクライミングがそれだ。それでは手に負えない、あるいはルール上やむをえなければ複数になるしかない。加えて、自然という不確定要素を舞台に選んでしまった者は完全な成功などないことを識らなければならない。そうした中でも、「知る者は伝える義務がある」のだ。植村直己さんも、長谷川恒夫さんも、最後の挑戦を終えたら子供たちを対象とした自然学校を開くのが夢だった。社会の最少単位である家族も、つまりは生きることの機微を伝えていくものだと思えば、真理はかなり近い。

そうした意味で、敷居を低くしてアドベンチャーレースの普及に貢献している我部さんの活動は素晴らしい。地域を巻き込み、地元の人たちも楽しめるようにし、来訪者にはその地域の良さを体験させる手法には未来がある。先鋭的に闘い続けているEAST WINDの田中さんも里山アドベンチャーやファミリアドベンチャーを始めていて、同じところに辿りついているように見える。

お陰様で私も今回、30年来通っている奥多摩で白丸集落を初めて歩いたし、レースでなければあんな状態・装備で仲間を山に入れたりしないだろう。さらに自転車をかついであんな斜面も下りたくない(素直に林道から帰ります)。非日常を存分に楽しめた。自らも楽しみつつ、やるべきことをやる。弱音を一言も吐かずに笑顔を絶やさなかった美人女子大生は素晴らしかった。弱音ばかり吐きながらも走り続け「次の大会も出たい」と言う長男も修正の余地を残しつつ誇らしい。多くの選手がそれぞれの形で楽しむ姿もたまに素敵で、またお会いしたくなる。

ニュージーランドで、ある選手が「人生は短く、レースは長い」と笑ったのが心に残っている。そんなレースをまた一緒に走らせて頂きたい。

■ 祥くんのコメント

このレースは、厳しいけれど地図読みなどでチームワークを深めることができ、他のチームの方たちとも気軽に話せるいいレースだと思います。また、必ず地元の人との交流があるのも、他のレースにはない、エクストリームシリーズの魅力だと思います。